

〔茶道筌蹄<sup>五</sup>〕酒次之分

錫 利休形德利なり

〔西遊記 續編一〕古朴

邊國にても城下町家などは、都の風にも押移るものなるに、薩摩などは格別の遠國故にや、城下にも猶古風残り、器物も酒の銚子といふものなし、皆錫の德利なり、略下

〔八水隨筆〕誰やらのはなしに、定家の陶とやら、ふくべとやらを所持したる人有り、古物にても雅器にあらねば、何の用にた、ず、此類また有、予がまれる大井左大夫殿と申せし御方、甲州の族にて花菱を紋とす、此家に勝頼の備前德利あり、先祖の器とては是ばかりなれども、用なしとてわらはれぬ、

〔毛吹草<sup>三</sup>〕備前 伊部燒物酒瓶 藍壺 鉢等

〔槐記〕享保十七年三月廿四日、下加茂松林院御成 大膳 御供 御出 門 拙 御酒 ビセン 德利

〔玉露叢 二十二〕寛文十一年六月十八日ニ、ベツカウノ德利中略 右ノ品々日光御寶藏へ納メ玉

フ、

〔皇都午睡<sup>三編中</sup>〕品川宿は、略中 女郎は十文目にて雑用は別なり、先茶屋より白丁とて、白の大德利を提て、女郎屋へ案内して藝者を呼ぶ、

〔好色一代女<sup>四</sup>〕墨繪浮氣袖

長屋住居の侍衆に、召使はれし中間と見えしが、朝の買物芝肴を籃に入れ、片手に酢德利附木を持添へ、略下

〔西鶴織留<sup>四</sup>〕家主殿の鼻ばしら

又かうじ屋から蟬の大ききしたる油蟲ども、數千疋わたりきて、略中 醬油の德利にはいり、鹽籠